

# 2026年度 目白大学

## 入学式 式辞

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。目白大学を代表して、皆さんのスタートを心よりお祝い申し上げるとともに、新たに本学の一員となられた学部生／大学院生の皆さん一人ひとりを心から歓迎いたします。

今日という日は、皆さんにとってかけがえのない一日です。大学生活への期待と、それから多少の緊張も、胸に抱きながら今この瞬間を迎えておられることと思います。期待も、緊張も、すべて今のあなたの正直な気持ちです。そのすべてを大切にしながら、目白大学での学びと生活を歩んでいただきたいと思います。

また、これまで学生の皆さんを支え、導いてこられた保護者の皆様にも、心よりお祝いを申し上げます。私たち目白大学の教職員は、学生一人ひとりをよく理解し、その成長を支援してまいります。どうか安心してお預けいただきますよう、お願いいたします。

さて、本日より、皆さんは目白大学の一員となりました。この節目にあたり、まず本学の建学の精神についてお伝えしたいと思います。

目白大学の建学の精神は「主・師・親」です。学園創立者の佐藤重遠先生が、大正12年の創立時に定められたこの言葉は、日蓮の著作『閑目抄』に由来しています。「主」は社会への責任と貢献を、「師」はこれまでの学問を尊重しひたむきに学ぶ姿勢を、「親」は家族をはじめすべての人を尊重する心を表しています。社会に貢献し、真摯に学び、他者を尊重する。シンプルに見えて、しかし生涯をかけて実践し続けることの難しい、深い教えです。百年以上にわたって本学が受け継いできたこの精神が、皆さんの大学生活の中で少しずつ自分のものになっていくことを願っています。

さて本日は、皆さんがこれから取り組む「学ぶ」ということについて、少し考えてみたいと思います。

大学での学びは、高校までの学びとは根本的に違います。高校までは、すでに答えのある問いに向き合うことが中心でした。しかし大学では、自ら問いを立てること、そのものが学びの出発点になります。どんなに優れた答えも、問いが平凡であれば、平凡な知識にしか至りません。逆に、良い問いさえ立てられれば、問いを探究していくことで必ず新しい世界が広がります。大学の四年間、あるいは大学院での研究において、皆さんに最も磨いてほしい力があるとしたら、それは「良い問いを立てる力」です。

では、良い問いとはどのようなものでしょうか。それは多くの場合、誰もが当然だと思っている「当たり前」への、ちょっとした違和感から生まれます。一つ、例をご紹介しましょう。「よいことをした人にはよいことが起き、悪いことをした人には悪いことが起きる」。皆さんも一度はそう感じたことがあるのではないのでしょうか。「努力は必ず報われる」「因果応報」「自業自得」。そういった

言葉にも通じる、私たちが日常的に持っている世界の見方です。

1960年代、アメリカの社会心理学者メルビン・ラーナーは、この見方にある疑問を持ちました。研修の現場で、温厚で善良なはずの人々が、苦しんでいる患者に対して思いのほか冷たい見方をしているのに気づいたのです。また別のときには、ごく普通の善意ある人が、恵まれない立場の人々を「自己責任だ」と非難するのも見かけました。善良な人間が、なぜ苦しんでいる人に冷淡になるのか。これがラーナーの問いの出発点でした。

既存の心理学では、この現象をうまく説明できませんでした。そこでラーナーは一つの仮説を立てます。人間には「世界は公正であるはずだ」という根強い信念がある。そしてその信念を無意識のうちに守ろうとするとき、人は苦しんでいる人に対して「きっと本人にも原因があるのだろう」と考えてしまいやすくなるのではないかと。実験を重ねた結果、この仮説は裏付けられました。

この発見が興味深いのは、問いの立て方にあります。「人が苦しんでいる人に冷淡になることがある」という現象は、誰の目にも映っていたはずですが、しかしそこに「なぜ？」と問いかけ、人間の心の奥にある信念の働きとして丁寧に解き明かしたのは、ラーナーが初めてでした。良い問いは、見えていたのに見えていなかったものを、浮かび上がらせます。そしてこの発見は、善意ある人間が気づかないうちに他者に冷淡になってしまうことがある、という私たち自身への穏やかな問いかけでもあります。

そして、この「良い問いを立てる力」は、これからの時代においてますます重要になります。皆さんもご存知の通り、AIが急速に社会に浸透しています。特によく用いられている生成AIは膨大なデータからパターンを学習し、問いかけに対して「それらしい文章」を生成する技術です。正確な情報が豊富なテーマについては、AIも概ね正確な答えを返すことができます。しかし、正確な情報が少ないテーマや、個別の状況への判断が求められる場面では、もったもた見えながら実は誤った情報を生成してしまうことがあります。

そして何より、AIにはできないことがあります。それは「誰も立てたことのない問いを、自分で立てる」ということです。AIはあくまで、すでに存在するデータの組み合わせから答えを生成します。問いそのものを生み出す力は、現時点では人間にしかありません。だからこそ、皆さんには在学中にぜひ、この力を磨いてほしいのです。

さて、今日のようにAIが発展すると、AIを使えば、いつでも、どんなことでも学べてしまうのではないかと。そう思う方もいるかもしれません。確かに、AIは知識を得るための強力な道具です。しかし、AIと人間の教育のあいだには、大切な違いがあります。AIはデータからパターンを学びますが、私たち教員が大切にしたいのは、そのパターンからの「ずれ」の部分です。皆さん一人ひとりが持つ固有の経験、得意なこと、苦手なこと、興味の向き方、ものの見方。そうした一人ひとりの固有性に、時間をかけて丁寧に向き合うことが、私たちの仕事だと思っています。AIがどれほど進歩しても、皆さんと同じ時間と空間を共に生きながら、その成長を共に喜ぶことはできません。だからこそ私たちは、皆さんと直接向き合い、言葉を交わし、一人ひとりを理解しようとします。それがAIには代替できない、教育の核心だと考えています。

創業者佐藤重遠先生は、こんな言葉を残されています。「人を育てることは、木を育てるこ

とと同じだ」と。木は、植える者の思い通りには育ちません。土の質、水、光、風。さまざまな条件が絡み合いながら、木は自らの力で育っていきます。育てる者にできることは、環境を整え、よく観察し、木が自らの力を発揮できるように寄り添うことです。学生一人ひとりにも、それぞれ個性と呼ばれる特徴があります。一人一人個性のある学生の皆さんに対して、先回りして型にはめようとするのではなく、その人ならではの歩みを辛抱強く待ち、支える。それが教育の本質だという信念が、この言葉には込められていると思います。

目白大学の教育理念「育てて送り出す」は、まさにその精神の上に成り立っています。皆さん一人ひとりをよく見て、よく聴いて、よく理解する。それぞれの個性を尊重しながら、適切な目標を示し、着実なフィードバックを積み重ねていく。教員がチームとして連携し、皆さんの成長を多角的・継続的に支えていく。そうした丁寧な教育を、本学は揺るぎない姿勢で続けてまいります。

本学には、その理念を体現する豊かな学びの環境があります。8学部16学科という多彩な学問領域は、皆さんの知的好奇心に幅広く応えるものです。学部や学科の枠を超えた学び、課外活動、地域連携、海外留学など、教室の外にも無数の機会が広がっています。さまざまな価値観や背景を持つ仲間との出会いは、皆さんの世界を広げ、人間としての深みを与えてくれるでしょう。どうか失敗を恐れず、積極的に挑戦してください。本学の教職員は、皆さんの挑戦を全力で支えます。

大学院に進学された皆さんも同様です。学部から進んだ方、社会経験を経て学び直しを決意された方、海を越えて研究を志された方。歩んできた道はそれぞれ異なりますが、「育てて送り出す」という本学の理念はすべての皆さんに変わりません。

最後に、皆さんへ一言申し上げます。ラーナーが日常の違和感に問いの種を見つけたように、皆さんも身の回りの「当たり前」を問い直す姿勢を大切にしてください。木が思い通りに育たないように、学びも人生も、自分の予想を超えたところで深まっていくものです。その不確かさを恐れるのではなく、そこに好奇心を向けられる人間でいてください。「主・師・親」の精神を胸に、自らの可能性を信じて、目白大学での日々を全力で生き抜いてください。私たち教職員は、皆さんと共に歩み、皆さんの可能性を信じ、支え続けます。

新入生の皆さん一人ひとりの、これからの輝かしい飛躍と成長を心から祈念し、新たなスタートにあたっての式辞といたします。

2026年4月2日

目白大学学長

今野裕之